



～食とエネルギーのテーマパークを展開

〈41〉 たまエンパワー

—東京都多摩市

みらいを耕そう ～次の時代の一次産業づくり

大震災契機に地域主導再エネ事業を開始

2011年3月11日の東日本大震災を契機に、生まれ故郷の東京都多摩市で、市民が中心となり「一般社団法人多摩循環型エネルギー協会」が設立された。環境省のモデル事業に採択、屋根借り太陽光発電事業を行う多摩電力合同会社が発足した。そして、小中学校など市内外13ヵ所に市民債を活用した太陽光発電所(550kW)が作られた。筆者は当時働いていた会社を辞め、多摩市にUターンして同組織の立ち上げに参画、この経験を元に、来るべきエネルギー転換を地域から牽引するため、事業を通じて知り合った数人で、「たまエンパワー株式会社」を2015年4月に設立した。

同社はホワイトフランチャイズという独自システムを構築、地域主導の発電所づくりを後押ししてきたほか、企業や自治体の脱炭素の戦略的コンサルティング等を手掛けている。そんな中、2年半前に多摩ニュータウンの西の端に位置する相模原市でソーラーシェアリング(以下、SS)の話が持ち上がった。

ソーラーシェアリング建設の経緯

SSは営農型太陽光発電とも呼ばれ、農業と太陽光発電を同時に行う新しい試みである。農地は農地法という法律で守られ、農業以外の利用には強い規制が掛かっている。それ故、農地は農地として保全されてきた。2011年以降、全国に広がっ

た太陽光発電は比較的規制の緩い雑地や山間部に集中、景観や土砂流出など地域で様々な摩擦を生む結果となった。他方、農地は高齢化・過疎化により、農業生産人口の減少と耕作放棄地の拡大に歯止めがかかっている。SSは農作物の生育に支障がない程度に隙間を空けてパネルを設置、農地空間を立体的に活用してダブルインカムで農家の収益を安定させ、農業の持続性を高めることができる。慶応大学の金子勝名誉教授曰く「エネルギー兼業農家」。言い得て妙である。かくしてSSは農業衰退への処方箋として農水省のお墨付きも得て、全国各地にその動きが広がっている。

そんな魅力満載のSSだが、我が多摩市の農地面積はわずか2.2%。従って、そうした動きを横目に見つつ、今まで取り組む機会がなかったが、相模原の事業者との出会いによって相模原市の山間部である津久井エリア前戸地区の人達とご縁ができ、SSの取り組みを検討することになった。

農業も、エネルギーもマジメにやる

「何をつくるか?」は大きなテーマである。10数種類の作物を検討する中で、SSとの相性を考え、光の要求量が比較的少なく(多少日陰でも問題なく育つ)地域の気候風土に合致し、地域特性が生かせる作物としてブルーベリーに着目。SSの中には売電が主目的で農業をおざなりにするケースも散見されるが、本末転倒と言わざるを得ない。私たちは自分たちがやるなら農業の基盤をしっかりとって稼ぐ。その上でエネルギーもやる。それがあべき姿という認識のもと農業法人「株式会社さがみこファーム」を設立した。ただ、如

会社概要: たまエンパワー株式会社

住所 東京都多摩市落合1-46-1 ココリア多摩センター4F

代表者 山川勇一郎

事業内容 地域エネルギー推進事業、コンサルティング事業、教育事業

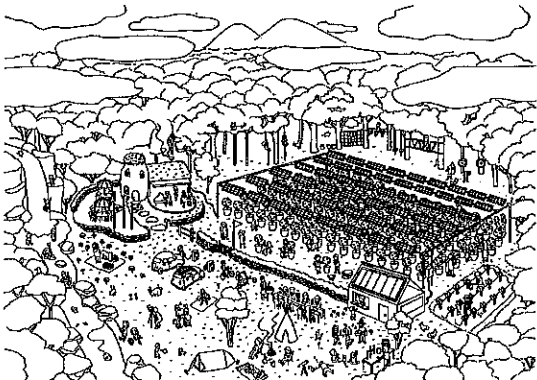
HP: <https://tamaempower.co.jp/>

何せん私たちは農業者としては素人。熟練の農業者の真似をしても何年経っても追いつけない。だが時間は待ってくれない。自分たちなりのやり方でテクノロジーを有効活用しながら生産性を高め、農業の新たな担い手として障がい者や子育てママや子どもなど多様な人を巻き込むことはできると考えた。そこで、ある程度マニュアル化が可能で、安定した生産と品質を期待できる栽培方法として「ポット養液栽培」を採用。イチゴの水耕栽培を露地でやるイメージである。これにより通常3～4年かかる収穫を2年に短縮できる見込みである。

次に観光農園化である。家族で楽しみながら摘んでもらう。週末にキャンプ客が多く訪れる道志川沿いにあり、地の利も生かせると考えた。実際ブルーベリーは収穫・出荷作業が人件費の65%を占める。それを観光客が担ってくれるため、収益性向上とともに、パネル下は思いのほか涼しく快適だ。観光農園とは抜群に相性が良いと考えた。ブルーベリーを軸に今後50種類のベリー類を栽培予定である。そうした構想のもと地権者と話し合いを重ね、農地を貸してもらうことになった。協力を申し出てくれた地権者さんに感謝したい。

農作業通じ「みらいを耕す」人を育てる

「ソーラーシェアリング」「養液ポット栽培」「観光農園化」など、いくつもの工夫を盛り込みながらエネルギーと農業双方が持続可能なモデルを模索してきた。ただそれだけではピースが足りない。私たちはそこに「教育」を据えた。エリア一帯を「食く図」観光農園プロジェクトのイメージ



とエネルギーのテーマパーク」ととらえ、様々な体験を提供すべく準備を進めている。子どもたちの職業体験、農作業を通じた生きる力の育成、ポータブル発電による防災力向上、家に持ち帰って実践しながら学べるキットなど多岐に亘る。訪れた人がブルーベリーを味わい、子どもも大人もまなびを持ち帰り、暮らしに生かしてもらおう。

自ら考え行動する、生きる上で必要な基盤（食・エネルギー）を作る人を「みらいを耕す人」と定義、こうした人々が社会に増えることが持続可能な社会をつくる原動力になると考えている。

「次の時代の一次産業づくり」への挑戦

検討2年。約3反の農地にブルーベリー苗木が550本、その上に128kW（遮光率40%）の太陽光発電設備が設置され2020年7月に稼働した。相模原市初のソーラーシェアリングである。現在、隣接地に第2期ブルーベリー550本と148kWの太陽光発電設備の計画が進行中、来春に稼働予定、その後、数百kWの計画が控えている。50種類のベリーが楽しめる体験農園「SAGAMICO BERRY GARDEN」は22年春オープン予定。それに先立ち、20年12月から「プレ会員」募集を開始、様々な体験プログラムを会員向けに提供していく予定である。

私たちはこのプロジェクトを農業とエネルギーを「次世代の一次産業づくり」の挑戦と捉えている。なお売電している電気は災害時には地域に無償で開放し役立ててもらおうつもりだ。そして売電期間終了後は地域マイクログリッドとして集落全体へのエネルギー供給も考えられる。太陽光発電所は地域の重要なエネルギーインフラだ。

チャレンジは始まったばかりである。この取り組みを通じて、地域に少しでも活気が生まれること、そして訪れた人が持続可能な社会の担い手として「みらいを耕して」くれること、そうした場を創れることに筆者自身、最高にワクワクしている。

〔代表取締役・山川勇一郎〕